

『Swing-bye』

カランカランと真鍮のベルを鳴らして店に入れば、お昼を過ぎたこの時間でも、相変わらず閑古鳥が鳴いている。手近な、通りに面したテーブル席に腰を下ろし、水を持ってきたマスターにアイスコーヒーと告げた時、既視感を得た。ああ、一年前と同じじゃないか。時間も、席も、アイスコーヒーも。ただ、ラジオから流れていた曲は、こんなに新しい曲ではなかった。

あのときは何の曲だったかと頭の引き出しを開けながら一口飲んだ水も、相変わらず温かった。

「ラテが、おすすめらつて。」

カフェラテを注文してから彼女は無邪気にそう言った。こんな時でも変わらずだじゃれを言う彼女を愛しく思い、それでも僕は新聞を見たかい、と問うた。首を横に振る彼女に、はやぶさがスイングバイしたよ、と告げる。彼女は不思議そうに小首を傾げ、続きを促した。

小惑星探査機の、はやぶさがね、地球の周りにやってきて、しばらく一緒に回って、地球の引力で加速したんだ。そして地球から離れて、宇宙の遠くへ旅立ったんだ。

言い切って顔を上げると、彼女は両目を大きく開いていて、僕は初めて彼女の両目の色が違うことを知った。彼女は俯き、ただ「そうですか」とだけ言った。

はやぶさは、皆の夢と希望を背負って旅立ったんだ。孤独な辛い旅だろうけど、皆が応援してるから、きつとどこまでも羽ばたけると、そう思うんだ。

僕も、応援してるから。懺悔のように呟いた声は果たして彼女に届いたか。彼女は俯いたまま、口を開いた。

「はやぶさは、それを望んだと思いますか。ただ地球と共に回り続けては、いけないのですか」

震えを隠しきれない声に胸が締め付けられる。まだ戻れると叫ぶ心にナイフを突き立てた。流れる血は、涙の色をしていた。

はやぶさは留まれないよ。皆の夢と期待を、裏切れないから。未知の世界への憧れを、捨てられないから。何よりも、地球がかかる期待に、応えたいから。

「ずるいですね」

彼女がそう言ったとき僕らは何も言わず、ただラジオだけが無邪気に沈黙を壊していた。

お待たせしました、アイスコーヒーとカフェラテです、とマスターが置いていったグラスを、そっと引き寄せる。その中に広がる黒を見つめていると、彼女が呟いた。

「寂しく、ないのでしょいか」

ずっと、見守っているよ。僕は誓った。宇宙の端っこ、この場所で。

さよならは別れの言葉じゃなくて、再び逢うまでの遠い約束、とラジオが夢を歌っていた。

水を一口飲んで、ラジオから流れてくる懐かしい声に、その声が紡ぐ切なく強い歌に耳をすませる。こいかぜというその曲は、早くも歴史に名を刻む名曲となりつつあるらしい。

はやぶさは、もう遙か遠くまで羽ばたいた。それでも見守るのだ。それが、地球の誓いだから。

お待たせしました、アイスカフェラテです、とマスターがそれをテーブルに置く。マスターの顔を見たが、彼は無言で立ち去った。

たまにはいいかもしれないと、一口飲む。黒にはおよそ遠いそれは、セピア色の味がした。